

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	幻の処女小説：岡本かの子『台湾愛国婦人』掲載三小説をめぐる考察
Author(s)	下岡, 友加
Citation	国文学攷, 244 : 1 - 17
Issue Date	2019-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049729
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



幻の処女小説

—— 岡本かの子『台湾愛国婦人』掲載三小説をめぐる考察 ——

下 岡 友 加

はじめに

本稿の扱う岡本かの子の小説は、次に掲げた①～③の三点である。

① 「塾友」(『台湾愛国婦人』第二九卷、一九一一・四。一一四～

一二二頁(二段組)

② 「モデル」(『台湾愛国婦人』第三八卷、一九一二・一。一一九

～一二七頁(二段組)

③ 「おきち」(『台湾愛国婦人』第四七卷、一九一二・一〇。八九

～一〇三頁)

いずれも愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』に掲載され¹⁾

冬樹社版『岡本かの子全集 別巻二』(冬樹社、一九七八・三)、昭

和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第四四卷』(昭和

女子大学近代文化研究所、一九七七・一)、ちくま文庫版『岡本か

子全集 第二二巻』(筑摩書房、一九九四・七)等、旧来の岡本か

子の著作年譜から漏れているテキストである。

『台湾愛国婦人』は新渡戸稲造をはじめとする台湾に縁ある教育者のみならず、塚原洪柿園、泉鏡花、伊藤左千夫、土屋文明、三宅花圃、与謝野晶子、与謝野寛、徳田秋声、広津柳浪、佐藤紅緑、真山青果、長谷川時雨、尾島菊子等、日本近代を代表する多くの作家たちが寄稿した媒体であるが、資料散逸のため長く稀覯本とされてきた。しかし昨年、奥州市立斎藤實記念館での所蔵が確認されたことにより、雑誌全八八巻のうち、八二冊分の内容が判明した²⁾。

②の小説「モデル」については平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『台湾愛国婦人の研究』(研究代表者・上田正行、國學院大學、二〇一四・二)が既に翻刻を行っている(函館市中央図書館蔵本に拠る)が、本格的な論考は未だない。①の「塾友」については、山武市歴史民俗資料館蔵本目次から掲載の事実自体は判明していたものの、該当頁欠損のため、斎藤實記念館蔵本により、

はじめて小説本文を見ることが可能となった新資料である。③の「おきち」も掲載巻自体が斎藤實記念館にてはじめて確認された新資料である。これら資料の出現により、従来「かやの生立」〔解放〕一九一九・一二とされてきたかの子の処女小説は、それより八年半遡る明治末に発表され、しかも当時期連続的に小説の発表が行われていたという新事実が明らかとなった。

本稿は『台湾愛国婦人』掲載三小説が本当にかの子の手になるものかという点も含めてテクストの検討を行うものである。結論を先んじて述べれば、三小説はかの子の「模倣期」(福島章)^③の内実と課題を知らしめる内容及び表現であり、のちに展開されるかの子文学的特質の「断片」を確認することのできる貴重な資料と位置づけられる。

一 三小説の内容とそのモデル

① 「説小 塾友」〔台湾愛国婦人〕第二九巻、一九二一・四

【梗概】本郷の梅園女塾の寄宿舎から小石川の広瀬女学校へ通う千瀬子は、塾長から「不幸な境遇に居た」という新しい転入生・河端貞子との相部屋を提案される。貞子は入塾後、半月経過しても塾友たちに馴染まなかったが、他の人と分け隔てなく接する千瀬子には心を開き、自身の身の上話をする。彼女は長崎の豪農の家の出身で、幼い頃から愛情のない父母の諍いに巻き込まれて人間不信に

なっていた。貞子はその後、外向的になるような変化を見せるが、冬休みに千瀬子が入院中、突如塾を出ていってしまう。

「キリスト教主義で割合に自由」で「西洋臭い所」と説明されている梅園女塾は桜井英学塾を、「旧式」の教育を行うとされている広瀬女学校は跡見女学校をそれぞれモデルとしていると推定される。かの子の履歴とはほぼ一致するそれを持つ千瀬子が広瀬女学校(＝跡見女学校)の「四年級」へ通い、梅園女塾(＝桜井英学塾)に通いはじめているという設定からすれば、小説は一九〇六年時のかの子の経験を反映していることになる。

広瀬女学校では、「新派の歌人として有名な」佐々木という国語教師がいて「歌泉」と云ふ回覧雑誌様のもものが存したとされている。これは歌人・服部躬治の指導のもと、校友会誌「汲泉」に短歌を寄せていたかの子の跡見女学校の様子を想起させる記述である。^④また、千瀬子の友人で「京人形の様な」と形容される藤子は、かの子の跡見女学校時代の親友・藤井敏子を、また千瀬子の兄・橘郎はかの子の兄・大貫雪之助をそれぞれモデルにしていると考えられる。小説では千瀬子が広瀬女学校で「一室に十人近くの雑居」の寄宿舎住まいをしていることに同情した兄・橘郎が「二人宛の部屋を成丈一人でと頼み込むで」、一年前から千瀬子を梅園女塾に寄宿させたとある。かの子が梅園女塾のモデルと考えられる桜井英学塾に寄宿していたという経緯は旧来の年譜には確認できないが、小説

の記述は細部に渡っており、事実在即している可能性が高い。⁵⁾なお、兄の橋郎という名は大貫家郷家の住所・神奈川県橋樹郡から一字を借りたものであろう。

以上のように、本小説はかの子自身しか知り得ない履歴情報に基づいて書かれており、署名の通り、彼女の小説と判断してまず間違いないと考えられる。よって、現時点ではこの小説をかの子の処女小説と位置づけるべきである。

全体の構成からすれば、結末部分が急転直下、やや尻切れトンボのような印象を与え、表現も後年のかの子の文章と比べれば生硬でぎこちないことは否めないが、「暗い境遇」によって形成された自身の性質から他人を信じることができず、「流転と孤独の影」をまとう貞子の不幸を千瀬子と対照させつつ描くことを主眼とした小説として破綻はない。

②「説小 モデル」(『台湾愛国婦人』第三八巻、一九二二・二)

【梗概】青年画家・浩吉は「幼い時何処かで一寸見て、おびたゞしく頭へ興味を残した、『革羽織』を書いて見やうと思ひ起」ち、それにふさわしいモデルを周旋家で探してくる。浩吉の妻・倉子は、モデルとなった八十歳くらいの元・旗本次男の老翁が倉子の実家から届いた餅を盗むなど卑しい人物であることに気がつき、軽蔑する。しかし、絵を立派に完成させた夫にはそうした事実を打ち明ける。ことなく、夫と夫の絵を前にして「あの横著な汚い老翁なんか、此製

作品に、何の係もないものだ」と思う。

一読して浩吉・倉子夫妻のやりとりは、一平・かの子夫妻を思わせる内容である。「洋画を習ふ前三年ほど父から習はせられた浮世絵の下地に因へられ」たという浩吉の画学歴は東京美術学校入学前、武内桂舟に三年間師事していた一平のそれと合致する。「二階の画室」を持つ浩吉・倉子夫妻の家Ⅱ小説舞台も一平・かの子の新居(一九一一年三月以降入居・赤坂区青山北町六丁目五五番地アトリエ付き二階家)に基づいていると考えて矛盾はない。やはり本小説もかの子の手になるものと考えられる。小説内の季節が冬であることをそのまま受け取れば、一九二一年末の岡本家の様子が材料とされていることになる。本小説で目につくのは、夫の芸術を崇め、信奉する妻・倉子の次のような姿である。

一体、浩吉は、自分の性質や趣味をくはしく考へて見ると、細い線より太い線、明るい色より暗い色、弱々しい女性的のものよりも確乎した男性的のものを書くのに適當つて居る個性を曲げて、一つには洋画を習ふ前三年ほど父から習はせられた浮世絵の下地に因へられ、また一つには花や女の優婉な華麗な点を多く主眼として居る師や友達の行き方を、徒らに真似て居たやうな今迄に飽き足りない悟りを見出したのは、半年ばかり前のことである。

其悟りの晝の光の前に、妻の倉子も熱心に額付いたのであった。

實際の一平・かの子夫妻の情報を参照するならば、一九一二年二月一六日付のかの子の兄・大貫雪之助宛書簡には「我々夫妻も色々なことを犠牲にして迄もいくらかづつの發展をたのしみながら鈍才をばげまして勉強致しております」とあり、小説の内容との齟齬はない。しかし、同年六月付の雪之助宛書簡になると、「岡本もまずくまめに無難にはたらいて居ります」と夫への言及はいささか熱を失い、さらに別の書簡では次のような記述となる。

一平は人間としては誠に面白いかはりに到底く一生一凡俗以上にはなり得ない見極めが付いたやぶに私には感ぜられます。

私はこの風俗の面白さにつり込まれるのを恐れます。せめて域に達せられぬ迄も私丈は芸術的に苦しく快い努力に一生を送つて死に度いとおもひます。(年月不詳・大貫雪之助宛書簡)

一九一二年一月二日に雪之助が急逝していることからすれば、夫への「見極め」を語る右書簡は一九一二年六月以降から一〇月の間に投函されたものと推定される。すなわち、小説「モデル」は、かの子が右のような夫への失望に至る以前の、結婚直後には存した夫への信奉の念を記念碑的に刻印しているテキストと言えようか。ただし、芸術に専心する夫とそれを支える妻の様子を描くなかで、アトリエ付きの家に住む前に一平・かの子夫妻の間に既に誕生(一九一一年二月一六日生)していた長男・太郎の存在は小説内では完全に抹消されている。そうした小説と現実との差異は本テク

ストが岡本家を材にとりながら、あくまでへつくられたものゝであることを明かすが、芸術家夫妻の日常を描いて構成上無難にまattered一作と言えろ。

③ 説小「おきち」(『台湾愛国婦人』第四七巻、一九二二・一〇)

【梗概】北国の海に近い貧農の家に生まれたおきちは父・長兄が亡くなった後、村の豪農の家で子守奉公に、さらに上京して東京の叔母の家である大きな洗湯で一四歳から七年間働いていた。ところが叔父の死後、たちまち借金がかさんで零落した叔母の家からは一文の給金ももらえず、おきちは再び他所奉公に出る。現在の奉公先に不満のあるおきちは、仲介人に別の奉公先を依頼する。辞めることを前提としておきちは家の無花果を無断で食べたり、鏡台の後ろに落ちていた銭入れから銀貨を盗んだりする。翌日おきちは帯の間に盗んだお金を隠したまま自身の計画通り奉公先を出ることに成功する。

かの子自身の経験が利用されていることが明白な前の二作とは異なり、おきちという人物のモデルが不明であり、かの子の署名なしに彼女の小説と認識することは困難な内容である。ただし、逆に本テクストをかの子の小説ではないと否定するだけの根拠にも欠ける。むしろ、「北国の海に近い」家の出身という設定からは函館生まれの一平が、おきちが新たな奉公先として考えている「字書の長田さん」からは一平の父の職業が想起される。一平は「へぼ胡瓜」

『雄弁』一九一九・九、一〇、一一、一九二〇・一、二、四、七、八、九)に様々な女中に散々な目に遭わされた経験を記しているが、一平・かの子の新居に雇われていた下女の履歴が利用されて書かれたものか。⁷⁾

本小説で最も印象的なのは、おきちの粗野でしかし抜け目のない性質が、生き生きとした会話や描写によって詳細に描き込まれていることである。次の奉公先へ移動するためのお金や時期の算段をしながら「またどうにでもして見やうと気を取り直しては働」き、『あなた、働くことは私自身は惜みませんよ。』と「横幅広く太つた健康さうな体を、自分ながら頼母しさうにこゝろもち振りかげんにして」言うようなおきちの姿は、「塾友」の女学生たちのかしこまった振る舞いに比べて、実に自由闊達である。つまり、境遇からすればむしろ作家自身からはかなりかけ離れた他者⁸⁾おきちを描く筆の方がのびやかなのである。少なくとも『台湾愛国婦人』掲載の三小説を並べた際、もっとも作家の筆ののっているのは、明らかに「おきち」である。

河野多恵子ほかの子文学が多様な人物を各人の個性を生かすかたちで造型しえたことを高く評価しているが、⁹⁾おきちをそうした登場人物の一例として数えることも可能であろう。また、「おきち」は山本健吉のいう「彼女の全作品は女性の生命力に対する讃歌であったと言へないことはない。」¹⁰⁾といった、かの子文学の特徴を感じさせるテキストとしても位置づけられる。

ただし、本小説の惜しむべき点としては次の二点が指摘できる。一つには、おきちのたくましい生命力は描かれているものの、結局はその写真に終始しているという点である。この小説はいわば「出口」のない描写の積み重ねであり、展開上、何の救いもなければ、未だ破滅すらも訪れていない。ましてや外村彰がのちの昭和期のかの子の小説群を指して述べる「人間の思惟経験を越えた、この世を運行させる存在」としての「生命」や「絡み合」う人物の動向を、いわば全知の主体(「仏」)が「生命の糸」によって統べている世界¹¹⁾は全く見えない。そこが後年のかの子の小説と決定的に異なる点である。二点目は、おきちのかつての奉公先である叔母の家についてという一人娘の民子の登場が十分に生かされていないということあげられる。本小説は民子は高島田、おきちは銀杏返し、女中・お時は庇髪と、髪型によって女性の地位や意識を明快に差別化して描くが、貧農の家に生まれ、その後苦勞しながらもしたたかに生き延びていくおきちと、「大家の令嬢の様な気高さを持つて居た」民子の零落とは、相照らす生として提示されることが目論まれていたはずである。その点で民子の書き込みが中途半端な憾みがある。

二 三小説の表現、その共通点

以上見た通り、『台湾愛国婦人』掲載三小説は内容上においては三者三様であるが、表現面に着目すれば、いずれも三人称客観小説

の体をとりながら、特定の女性の登場人物に内的焦点化を行うという共通点を持つ。のちのかの子の小説群にも典型的に見えるこの方法は明治末に既に獲得されていたと言える。また別の共通点としては、三小説は次に掲げた通り、みな会話（セリフ）文から始められているということがあげられる。

① 「説小」 塾友」

『実は。』と塾長は白い髭を一つしごいて、

『今度大阪の宗教女学院に居た人を、是非つて頼まれてな、其をあなたの室へと思ふのぢやが。』と千瀬子の顔色をうかづつた。

② 「説小」 モデル」

『どうも此頃のやうに、モデルがふつて、いでは実に困る。』と云ひながら、浩吉は今日で三日目のモデル周旋家へ、また出かけた。倉子は、青年画家の浩吉に嫁いだから、浩吉が使ふモデルを色々見た。

③ 「説小」 おさち」

『そりやおさちさん、務め憎いのも無理はないさ、とてもお前さんに、こんな窮屈なやかまし家が向くもんかね。ま行ツて御覧な、その長田さんてえのはね、夫婦に赤ン坊ばかりで、旦那はなんでも字を書くし、やうばい、とかで気のさくい人だとき、』
『…』

このようにいきなり会話文で始められる小説形式は、これまでかの子の処女小説とされてきた「かやの生立」(『解放』一九一九・一二)にも同様に見られるものである。直接話法による書き出しは決して特異な方法とは言えないが、かの子の文学上の先達であった兄・大貫雪之助(筆名・晶川)の小説「お須磨」(『明星』一九〇七・九)、「歯」(『帝国文学』一九一〇・三)、「出来事」(『帝国文学』一九一〇・一〇)も同じ方法を用いていることは指摘しておくべきだろう。かの子の「かやの生立」自体、晶川の小説「二人の生い立ち」(『新思潮』一九一〇・一一)とタイトルからしてその類似は明白である。福島章は「病跡学」の立場から大正元年までのかの子を「模倣期」としたが、まさにその時期に書かれた小説には指摘の通り、兄の影響の痕跡を確認することができる。¹⁾

なお、会話文(セリフ)による書き出しは、のちに発表されたかの子の小説「汗」(『週刊朝日』一九三三・五・二八)、「狂童女の恋」(『週刊朝日』一九三四・五・六)、「高原の太陽」(『むらさき』一九三七・六)、「老主の一期期」(『いのち』一九三七・一〇、原題は「一期期」)、「噴水物語」(『丸の内草話』青年書房、一九三九・五)、「美少年」(『鯨』改造社、一九四一・三)にも確認できる方法である。ヨーロッパ滞在中のエピソードを用いていることが明白な「噴水物語」は例外として、「高原の太陽」は女学校を出たばかりの、「美少年」は少女時代のかの子の経験がそれぞれ生かされた小説であり、「老

主の一時期」もかの子の実家（先代）の事実を反映したものとされている。¹² また「汗」は一九一四年までの製造である。「一円銀貨があつた時分」の話であり、「狂童女の恋」も、一九一四年初出の北原白秋の詩が織り込まれていることから、発表時＝一九三三年以降に
ならなければ書けなかった材料ではない。

すなわち、河野多恵子がかの子の小説について、「デビュー後に習作時代の作品が幾編も発表されているようである」と指摘する通り、右のように会話文から始まる構成の小説は、かなり早い時期に原型が書かれたものと考えることができのではないだろうか。『台湾愛国婦人』掲載三小説並びに「かやの生立」が揃って同様の書き出しであることがそうした推定を可能にしよう。また、『台湾愛国婦人』掲載三小説は次のようにいづれも一文としては極端に長いセンチメンスを擁している点でも共通する。

① 「説小」 塾友」

ら、せんが、たの段梯子を登つて、取り付きの室、明け開いた南向の窓から、初冬の午後の日影が暖く溶け込むだ八畳敷一ぱいに、本箱やら、鏡台やら、琴やら、我儘に、とは云へ随分意匠を凝らしたつもりりの装飾や、配置を、むざ／＼壊されるのかと思ふと、無闇に口惜しくもあつたが、やがて真中から仕切られても差し支へない様に片付けて、疲れた体を、ぐつたり机に倚せると、急に、不幸な境遇、気風の変つた娘、など／＼と云ふ先刻の

塾長の言葉を思ひ出して、稚いうちにも何処か老成た空想深い千瀬子の胸はもう様々な美しい、哀れな幻想に満たされて仕舞つた。

② 「説小」 モデル」

見るからとぼとぼした体を支るやうにして居た、煤けた其が手の油で少し光沢を持つたやうな、節の細かい竹の杖を、玄関のたゝきへ音を立まいとするぐらゐ叮嚀に、片隅へ立てかけて、『穿いて居たつてよろしいぢやありませんか。』と倉子が止めても、

『いえ、どう致しまして、お畳でも汚しましては。』と云うて、所々継が当つて鼠色になつた白足袋を脱つて、一寸泥土で汚れた爪先のところを揃へてつまんで、式台の片端へ置いて上つた老爺のきちんと脱ぎすてた薄べつたい駒下駄は、枯芝のやうに毛立つた、其でも表附きであつた。

③ 「説小」 おきち」

おきちは引き寄せられる様につか／＼と窓元へ行つて、萎へた浴衣の襟をぐつと開けると、一時に体中の汗を拭ひ取られたやうな宜い心持ちになつて、只でさへ細い眼をきゅつと細めて、青い葉先ばかり見える窓下の庭を見下したが、やがてく／＼と向き直つて、下等な油でべた／＼汚れた鬚の後れ毛を櫛で上げ、太い首へ衣紋を造つて、短かい襟足を吹かせながら、ぼつ

ち、りと薄暗へ浮き出した様な床の間の水晶の置き物へ眼をやつてう、つ、とりとした。

長文の所以を確認すると、①③は文中に「やがて」を配置するよう、同一人物の一連の行動・心理を時間の流れとともに一文であらわそうと試みたものである。②の文は「駒下駄は」を主語とするが、持ち主の「老爺」をそれ以前の叙述で会話も含めて十全に修飾しようとしたために長文化している。「かやの生立」も冒頭から長い一文で書き出されており、①③いづれにも見える、擬態語並びに「て」形の多用も同様である。同じ書き手としての連続性を感じさせる表現特徴と言えよう。

ちなみに、このようなセンテンスの長さは兄・雪之助（晶川）の小説には一切見られない。小宮忠彦は「かやの生立」の文体について樋口一葉からの影響を指摘しているが、¹⁵のちの昭和期のかの子の小説における長文例は「かやの生立」や『台湾愛国婦人』のものより短く、例も少なくなる。¹⁶かの子が文の長さに関して小説創作開始時とは異なる価値観へと転じたことが伺える。

三 昭和期の小説との関わり

ここでは、かの子が本格的に発表しはじめた昭和十年代の小説と三小説との内容上の接点について考える。かの子は自身の小説試作時について次のように語っている。

漸く小説を二、三篇試作し始めたとき、私はふと問題に行当つた。人間として一ぱん原始的で本能的な問題である。生の目的、死後の生活、幸福とは何か―解き出せば縷々尽きせず、しかも網の目のやうに連貫してゐる厄介な問題である。これを文学以前として、閑却出来る文人もあるが、私にはどうしても、さうかたづけて置くことが出来なかつた。（…）

一体自分さへ救はれてゐないものを、人に作品を遺して、たとへそれがどんなに褒められやうと、意味がないでは無からうか。たゞ人生の一時の解説か興味ではないか知らん。この疑いはいよ／＼深まつた。（『自作案内 肯定の母胎』『文芸』一九三八・四）

かの子が明治末に書いた小説を実際に確認しえた現時点からすれば、右の言は極めて意味深いものに見える。「一体自分さへ救はれてゐないものを、人に作品を遺して」とかの子は述べるが、そうした自身の心の在りようを反映するかのようには、「塾友」の貞子や「おきち」のおきちは、何ら救われないうままテキスト内に放置されている。かの子は右文章中で「小説は私には初恋」とも述べているが、実際に小説を書いてみることでいかに巧妙に言葉を連ねても、周回な構成を施しても、書く人間が未熟な世界観しか持っていなければ、迷走する人間の写実に終始するだけという現実の前に入った人間の筆を置かざるを得なかつたのではないだろうか。無論、迷える人間

の写実も小説の一形態であろうが、問題はかの子自身がそのような表現の次元を自身の小説のそれとしては是としない価値観を持っていたことにある。

昭和十年代のかの子には大正半ばから学び始めた仏教という精神的・思想的な支えがあった。¹⁷また、かの子は昭和四年から七年に渡ってヨーロッパ滞在という豊かな生活体験を積んだ上、自身の背後に〈かの子工房〉とも呼ばれる、夫・一平並びに新田亀三、恒松安男による人的支援体制を成立させていた。まさに「私は私の小説発表が遅れたのを決して苦にしない。そのため書くべき諸条件が却つて順熟して来たから」（「自作案内 肯定の母胎」）と本人が述べる通りの状況が昭和十年代には整っていた。その「順熟」の程度は『台湾愛国婦人』掲載の三小説と昭和期の小説との距離に明白である。少なくとも『台湾愛国婦人』掲載時点では、瀬戸内晴美が述べるような「家系の宿業と、女の性の生命力とが、河川から無限の海へのひろがりとなってなだれこむ水の性に結びつくかの子独自の感覚という、かの子文学の主題」¹⁸は未だ見えない。

ただし、遡及的に眺めるならば、主題の確立はなくとも、それを構成するための「断片」「切片」はいくつか見出せる。たとえば、何代にも続く「家系の宿業」といった大きな時間の流れを感じさせる設定ではないものの、「塾友」の貞子は生家の環境ゆえに性質を損なわれ、「おきち」のおきちも貞子同様に周囲の環境に促されて

流出、流転、逸脱の人生を選び、選ばされている。

また、「塾友」の貞子のように小説中の別の人物を相手に身の上話を始める人間は、「東海道五十三次」（『新日本』一九三八・八）の作楽井、「家霊」（『新潮』一九三九・二）の徳永老人、「鮎」（『文芸』一九三九・二）の湊、「河明り」（『中央公論』一九三九・四）の宿の娘や木下、「生々流転」（『文学界』一九三九・四）の安宅先生等、かの子の小説では多数の例がある。かの子の小説が用いるこうした構図を「人間同士の「精神の負担の融通」の様相」と捉えた外村彰は、「かの子文学に通底する特質」を次のように論じている。¹⁹

仏教語には「業縁」という言葉があるが、こうした何がしかの「業」を持つ人間存在が神秘的な「縁」で繋がれ、宇宙的な「生命」力の流れに包括されているといった大局的な世界観が、かの子の小説からは見出せるようである。こうした世界観を芸術表現によって粹づけ、そこで「業縁」の諸相のなかでの「完成」ないし「永遠」を追求しようとする「理想」志向を、かの子文学に通底する特質の一つとみなしてもよいと考えられるのである。

さらに付け加えれば、「モデル」の老爺や「おきち」のおきちは、小説中とともに盗みを行っているが、この盗みのモチーフは「やがて五月に」（『文芸』一九三八・三）の泉宗輔、「女性開頭」（『日本評論』一九四〇・二）の鳳作や能勢の小千という女賊等にも見える。後年のかの子にとって、そうしたモチーフは「ある種の魔性

や悪人がさうであるやうに、その根本に真実の探求性が深く潜んでゐて、その意味からいへばゆる善人より以上真摯の人であるかも知れない」という認識のもと、「一つの壊滅して行く生が、次の新生に転移して行く生命の不思議な作略」（岡本かの子「やがて五月に」自序・題名に就いて）²⁰を描くための悪行の一つであつたと考えられる。つまり、「モデル」や「おきち」に見える悪の点描は、のちのかの子文学ではテキストが織りなす「生命の更新術」（堀切直人）²¹に必然の要素として機能していると考えられるのである。

『台湾愛国婦人』掲載三小説は、明治末の時点で、かの子が既に一応の小説の結構を完成させるだけの筆力を確かに持ち合わせていた事実を示す。と同時に後年のかの子の小説との差異は「初恋」が実を結ぶまでに、かの子がどれほど自己の文学を肥え太らせたのか、その質量の大きさの実際を知らせている。「塾友」発表時を起点とすれば、文壇デビュー作「鶴は病みき」（『文学界』一九三六・六）発表に至るまでに、かの子は彼女の実人生の半分以上にあたる、二五年に渡る時間を小説研鑽に費やさなければならなかつた。

おわりに——『台湾愛国婦人』とかの子——

以上の通り、『台湾愛国婦人』掲載の三小説の内容並びに表現特徴をのちの小説群との距離をはかりつつ見てきたが、そもそもかの子は何故『台湾愛国婦人』という雑誌に小説を寄せたのだろうか。

かつて稿者は同雑誌とかの子の繋がりについて、与謝野晶子や『青鞥』との関わりから論じたことがあるが、²²現時点では上田正行が推定する通り、かの子の寄稿は同雑誌に多くのカットを描いている夫・一平の推挽によるとするのが至当と考える。²³斎藤實記念館蔵書に基づけば、一平の最も早いカット掲載は第二巻（一九〇九・一一）であり、その後も第八五巻（一九一五・一二）まで断続的な掲載が確認できるが、一平と雑誌との関係については、一平自身による次の言に注目したい。

都会の刊行物はいくら気張つても予の如き無名の画学生の絵は受付けて呉れなかつた。稀に受付けて呉れたその絵は紙上に御用雑誌の原稿を東京で取纏めてるものがあつた。その男と知合ひになりせつせと描いた。それは金を呉れた。予はそれを郵便貯金にして中の一部は遊びの金に他の一部は後に金持ちになる資本に大体率を腹で定めて居た。（どぞう地獄）（『現代』一九二二・二、一九三三・七、八、九、一〇。引用は『増補一平全集 第三巻』大空社、一九九〇・一〇に拠る）

明確な雑誌名は記されていないものの、一平の美術学校卒業（一九一〇年三月）前という時期からしても、右で語られる「御用雑誌」が『台湾愛国婦人』を指している可能性は極めて高いと言えよう。当雑誌の代表者は台湾総督府官僚・高山仰がつとめており、

雑誌は植民地支配において必要な協力と理解を女性たちに求めることを目的として刊行された媒体であった。²³⁾

一方、かの子側の資料としては、次の兄宛の書簡の一節が注目される。

近頃私は地方の雑誌などへ時々小説の安原稿を書かして貰って居ます、其内会心のものが出来たら兄さんの御目にかけます。

兄さんゆつくり養生してすつかり体をなほして一生の相談相手になつて下さいませぬ。(一九一一年九月二六日付大貫雪之助宛書簡)

ちくま文庫版『岡本かの子全集 第一二巻』(筑摩書房、一九九四・七)「岡本かの子年譜」(小宮忠彦作成)は右書簡傍線部をとりあげて「委細は明らかではない」とするが、「地方の雑誌」とは〈外地〉である台湾発行の『台湾愛国婦人』を指している可能性はないだろうか。²⁴⁾

少なくともかの子は『台湾愛国婦人』という〈内地〉の中央文壇とは離れた植民地発行の婦人雑誌という媒体であればこそ、歌や詩とは異なり、彼女にとって未だハードルの高かった小説を思い切つて発表し得たものと考えられる。また、夫を支える妻の様子を描いた小説「モデル」のようなテキストが寄せられた要因としては、夫・一平を介した寄稿であったろうこと、並びに掲載雑誌の性質をもあわせて考慮する必要があるだろう。「モデル」は、内容・体裁とも

に〈夫妻協同〉のテキストとなっていると先にも述べたが、愛国婦人会台湾支部自体が台湾総督府民政長官を会の顧問とし、その夫人が夫の任期中にあわせて会の支部長をつとめるという、まさに夫妻単位で代表をつとめる団体に他ならなかった。岡本夫妻が当会の形態をどこまで正確に認識していたかは不明であるが、「モデル」はまさに会の運営の様態や理念に合致するテキストなのである。

九ヶ月ずつの間隔をあけて掲載されたかの子の小説は、その後再び同雑誌に発表されることはなかった。「おきち」掲載の翌月、かの子の兄・雪之助が急逝する。さらに翌年一月には母アイも死去。裕福であった実家も破産に瀕す。その間、かの子は堀内茂雄との恋愛に入り、彼の子とおぼしき豊子・健二郎を出産するも、二人とも夭折。かの子は一時期精神的にも錯乱し入院する。のちに〈魔の時代〉と呼ばれることになる、かの子とその家庭の最大の危機、混乱混迷期である。『台湾愛国婦人』にかの子の名が再び見出されるのは、その〈魔の時代〉が漸く後半にさしかかった、第八三巻(一九一五・一〇)、八五巻(一九一五・一一)であった。しかし、寄せられたのは小説ではなく、いずれもかの子が最も得意とした短歌である。そして、まもなく『台湾愛国婦人』という媒体自体も終刊し、かの子の小説発表の場は閉じられた。明治末の小説寄稿の事実 は本人から一度も言及されることなく、研究史上においても「自筆年譜」(『現代短歌全集 第一七巻』改造社、一九二九・一二)通り、

大正八年発表の「かやの生立」が処女小説とされ続けてきたのである。

注 岡本かの子の小説「随筆・書簡の引用は『台湾愛国婦人』掲載小説を

除いて断りが無い限り、冬樹社版『岡本かの子全集』（一九七四・九）一九七八・三）に拠った。

(1) 刊行期間は一九〇八年一〇月〜一九一六年三月。全八八巻（但し、未発見の創刊号は新聞形態と考えられる）。年間最大八六一七五部刊行（一九一四年。台湾總督府民政部文書課編『大正三年台湾總督府第18統計書』一九一五参照）。斎藤實記念館の所蔵については水沢市立図書館編集『斎藤實蔵書目録 第2集』（斎藤實記念館、一九七五・三）に基づく出版社・三人社の発見。三人社は二〇一九年七月より『台湾愛国婦人』復刻版を順次刊行開始。

(2) 斎藤實記念館蔵書発見前までの雑誌所蔵判明分は全八八巻中五二冊分にとどまっていた。詳しくは、拙稿「新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻―与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に」（『日本研究』第27号、二〇一四・五）、並びに本稿末尾に付した『台湾愛国婦人』所蔵一覽表」参照。

(3) 福島章「岡本かの子の創造と他者のもつ意味」（『国文学 解釈と鑑賞』一九八三・四）は次のように述べる。

病跡学から見ると、岡本かの子の生涯は、次の三つの時期に区分するのが分かりやすい。すなわち、

- 1、模倣期（明治二十年―大正元年）
- 2、転回期（大正二年―一年ころ）
- 3、開花期（大正二年―昭和十三年）

ここで、模倣期は、かの子が生まれてから、病気に陥るまでの二十二年間で、文学少女であった少女時代をふくめて、岡本一平との結婚生活

の初期に至る歳月である。この間のかの子は、実兄の大貫晶川に触発されて文学への目を開かれ、兄とともに手を携えて「立派な文学者」となり、自分たちの生まれ育った旧家の物言わぬ家霊の呻きに、「言葉」（表現）を与えようと決意していた。

(4) 岡本かの子「だんまり女学生」には「和歌も服部先生といふ新派の先生が居られて非常に発達して居りました」と跡見女学校時代の様子が語られている（『池に向ひて』一九二〇・一一、古今書院）。

(5) 瀬戸内晴美かの子繚乱（『婦人画報』一九六二・七・六四・六。引用は『瀬戸内寂聴全集 第二巻』新潮社、二〇〇一・三）に拠る。かの子は跡見女学校入学と同時に寄宿舎生活をしたのではなく、「通学していた時の方が多かった」とみならず。岡本かの子「自筆年譜」（『現代短歌全集』第17巻、改造社、一九二九・二）には「跡見女学校寄宿より本郷桜井英字塾に移り宗教学語学などの見学旁跡見女学校に通学」とあり、小説の設定同様の記述がある。また、本小説の末尾部分では「十二月の二十日過ぎ」、学校の冬期休業中に帰国した千瀬子は「激しい脳病で、順天堂へ入院した」とあり、小説を閉じるための虚構の設定とも考えられるが、脳病はかの子自身の死因でもあり、旧来の年譜には記されていないかの子の病歴を反映している可能性も否定できない。

(6) このかの子の失望について岡本太郎は次のように解説する。「一平は生活苦のために純粹絵画を放擲して、漫画を描きはじめた。初めは生活の一時的手段にすぎなかったものが、そのままずるずる本業になってしまった。ここで母の、もう一方の芸術における夢が破られたのである。／＼かの子の芸術に対する妄執、その一徹さはすさまじいものがあった。旧家の道徳意識も手伝って、当時は極めて低級なものに思われていたボンチ絵（その頃はまだそう呼ばれていた）は、彼女にはまったく非芸術的なものとしか考えられなかった。芸術家に嫁いだはずの彼女は、まさに裏

切られたのである」(かの子文学の鍵『新潮』一九五四・八、原題「岡本かの子」。引用は『岡本かの子全集 別巻二』冬樹社、一九七八・三に拠る)。

(7) 恒松安夫「若き日の一平とかの子」(『芸芸春秋』一九五五・三)には「一平もかの子も家事には一切無頓着で、近所の担ぎ売りの魚屋の内儀さんが、通勤の家政婦役をやつて居た」とあり、やや設定は異なるが、小説冒頭に登場する「魚新の内儀」を想起させる。

(8) 河野多恵子「扱ばれたナルシズム」(『新潮日本文学アルバム44 岡本かの子』新潮社、一九九四・七)は「かの子の作品を読みながら、私は彼女の全作品中には一体幾人の人物が登場しているのだろうか、とふと知ってみたく思うことがある。夥しい人物を扱っているからである。しかも、主役、相手役、脇役、端役のそれぞれ役づくりが実に多彩、多種であるうえに、各人物の個性なり、性格なり、氣質を生かし切っている。このことにかけては、セッカレイの「虚栄の市」一作にさえ及ぶべくもないといえ、日本の近代・現代文学史中では随一といえるだろう」と評価する。

(9) 山本健吉「岡本かの子の文字」(『三田文学』一九四〇・四。引用は『岡本かの子全集 別巻二』冬樹社、一九七八・三に拠る)。

(10) 外村彰「岡本かの子の小説へひたごころ」の形象」(おうふう、二〇〇七・九)

(11) 注3に同じ。ただし、かの子は本格的な小説発表の前に、大正末から戯曲を集中的に発表している。このことは単なる兄の方法の模倣にとどまらず、かの子が会話形式そのものに積極的に自己の表現を見出そうとしていたとの把握も可能にするか。

(12) 岡本一平「本冊中の小説に就て」(『新日本文学全集 第二五巻』改造社、一九四〇・五。引用は『岡本かの子全集 別巻二』冬樹社、一九七八・三に拠る)。「先代に小説の如き権を承なる人物あり。その娘に暨の二人

の美しい姉妹のあつたことも事実」とある。また本小説の「発表は昭和十二年だが、その最初の書き出しは恐らく十年ほども前であらう」とも記されている。

(13) 北原白秋「ピール樽」(『白金之独楽』金尾文淵堂、一九一四・二二)

(14) 注8に同じ

(15) 小宮忠彦「解題」(『かやの生立』ちくま文庫版『岡本かの子全集 第一巻』筑摩書房、一九九四・一)

(16) 後年の長文例としては、たとえば次のようなものがある。

○「上田秋成の晩年」(『文学界』一九三五・八)「しかし、再三三説返してゐるそのうちに、自分に対して姉ぶつた物言ひや、自分を恨まず、なんでも世の中の無常にかこつけて悟りすまさうとする貞女振りや、賢女振りが、目について来て、やつぱり彼女も世間並の女であつたかと、興が醒めたるとは云ひながら、その意味からいつて、また憐れさが増し、兎も角も人が編んで呉れた自分の文集『藤葉冊子』の末に入れて貰つた。」

○「河明り」(『中央公論』一九三九・四)「だが、かういふ口争ひは、しじゆうあることだし、そして、私を溺愛する叔母であることを知ればこそ、苦笑しながらも、それを有難いと思つて、享け入れてゐる私との間には、いはゞ、睦まじさが平凡な眠りに墮ちて行くのを、強めて揺り起すための清涼剤に使ふものであつたから、調子の弾むうちはなほ二口三口、口争ひを続けながら、私はやつぱり河沿ひの家のことを考へてゐた。」

○「雛妓」(『日本評論』一九三九・五)「わたくしが、まあ綺麗ねと言つて例の女の癖の雛妓の着物の袖を手を取つてうち見返す間に雛妓はけふ、ここから直ぐ斜裏のK伯爵家に園遊会があつて、その家へ出入りの谷中住ひの画家に頼まれて、姐さん株や同僚七八名と手伝ひに

行つたことを述べ、歸りにその門前で諷くと奥さまの家はすぐ近くだといふので、急に来なくなり、仲間に訣れて寄つたのだと話した。」

(17) たとはば与那覇恵子「岡本かの子」〈純粋母性〉と〈役割母性〉——『国文学 解釈と鑑賞』、一九八〇・四は「岡本かの子は、仏教によって救われたことによって世界観を転換し、「救われるべき存在」から「救うべき存在」への変身をとげていった」とし、三枝和子「岡本かの子」(新典社、一九九八・五)は「仏教は、かの子を救った上で、さらに余りある文学的な力をも与えてくれた」と述べている。

(18) 瀬戸内晴美「かの子繚乱」(注5に同じ)。ただし、おさが七年つとめた奉公先が大きな洗湯であったという設定、「塾友」の河端貞子、千瀬子という名に「水」とのかすかな関わりを見ることもできなくはない。

(19) 注10に同じ

(20) 竹村書房、一九三八・五

(21) 堀切直人「生命の更新術」(堀切直人編『日本幻想文学集成10 岡本かの子』国書刊行会、一九九二・一)。堀切はかの子文学が「デカダンスの克服」を行い、「地球は脈動する。地球は生である」ともいうべきオプティミスティックなエコソフィア(共生智)をつかみ取った」ことを高く評価している。

(22) 拙稿「資料室 岡本かの子全集未収録短歌並びに『愛のなやみ』所収短歌の初出について」(『日本近代文学』第77集、二〇〇七・一)。その他、当雑誌には跡見花蹊(跡見女学校校長)や水野仙子(跡見女学校での歌の指導者・服部躬治の妹)といった、かの子周辺人物の寄稿も確認できる。

(23) 上田正行「講演」『台湾愛国婦人』という雑誌(『国文学 言語と文芸』第125号、おうふう、二〇〇九・三)

(24) 『台湾愛国婦人』の基本的性格については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位位置—新資料・第六十巻を中心に—」(『日本研究』第22号、

二〇〇九・五)、一雑誌『台湾愛国婦人』の性格—プロバガンダ、そして近代文学発生の場として—(『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、二〇一〇・二)参照。

(25) かの子の言には「安原稿」とあるが、当雑誌の原稿料は与謝野晶子の書簡中の言や多くの著名作家が寄稿している事実から、かなり高かったと推定される(拙稿「新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻—与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に—」(注2)参照)。当時の一平(朝日新聞入社前・かの子の地位からして、他の著名作家に比して安原稿にならざるを得なかったか。或いは、かの子の金銭感覚からすれば、原稿料はまさに安原稿であり、書きはじめたばかりの自身の小説を卑下する意も含まれているか。

【付記】貴重な資料の閲覧・撮影の許可を頂いた奥州市立斎藤實記念館、函館市中央図書館、山武市歴史民俗資料館をはじめとする『台湾愛国婦人』所蔵の各機関に御礼申し上げます。

なお、本稿は日本文学協会第三九回研究発表大会(二〇一九年七月七日、於京都女子大学)の口頭発表を加筆・修正したものであり、JSPS科研費JP17K02452の助成を受けた研究成果の一部である。

——しもおか・ゆか、広島大学大学院文学研究科准教授——

『台湾愛国婦人』所蔵一覧表

2019年11月現在（下岡作成）

巻	発行年月	個人蔵	スタンフォード大学図書館	山武市歴史民俗資料館	奥州市立斎藤實記念館	国立台湾図書館	函館市中央図書館	群馬県立土屋文明記念文字館	その他
1	明41.10								
2	42.1								○三島市立図書館
3	42.2								
4	42.3								
5	42.4								
6	42.5								
7	42.6	○前田均氏			○		○		○三島市立図書館
8	42.7	○下岡			○				
9	42.8								○金沢市立図書館
10	42.9								
11	42.10				○				
12	42.11				○				
13	42.12				○				
14	43.1				○				
15	43.2	○前田氏			○				
16	43.3				○				
17	43.4				○				
18	43.5				○				
19	43.6				○				
20	43.7				○				
21	43.8				○				
22	43.9				○				
23	43.10			○	○				
24	43.11			○	○				
25	43.12				○				
26	44.1				○				
27	44.2				○				
28	44.3			○	○				
29	44.4			○	○				
30	44.5				○				
31	44.6			○	○				
32	44.7			○	○				
33	44.8			○	○				
34	44.9			○	○				
35	44.10				○				
36	44.11				○				
37	44.12		漢文欄のみ	○	○				
38	45.1				○		○		
39	45.2				○				
40	45.3		漢文欄のみ		○				
41	45.4			○	○				
42	45.5			○	○				
43	45.6		漢文欄のみ		○				

巻	発行年月	個人蔵	スタンフォード大学図書館	山武市歴史民俗資料館	奥州市立斎藤實記念館	国立台湾図書館	函館市中央図書館	群馬県立土屋文明記念文学館	その他
44	45.7				○				○三島市立図書館
45	大1.8				○				
46	1.9				○				
47	1.10				○				
48	1.11			○	○				
49	1.12				○+附録巻				
50	2.1				○				○立教大学図書館
51	2.2				○				
52	2.3	○田中励義氏			○				
53	2.4				○				
54	2.5			○	○				
55	2.6		漢文欄のみ	○	○				
56	2.7				○				
57	2.8		漢文欄のみ		○				
58	2.9		漢文欄のみ		○				
59	2.10				○				
60	2.11	○下岡	漢文欄のみ						
61	2.12	○劉峰松氏	漢文欄のみ		○				
62	3.1		漢文欄のみ		○		○		
63	3.2				○		○	○	
64	3.3						○		
65	3.4				○		○	○	
66	3.5						○	○	
67	3.6						○		
68	3.7						○	○	
69	3.8		漢文欄のみ				○		
70	3.9		漢文欄のみ				○		
71	3.10		漢文欄のみ				○		
72	3.11						○		
73	3.12		漢文欄のみ				○		
74	4.1		漢文欄のみ			○	○		
75	4.2		漢文欄のみ			○	○		
76	4.3		漢文欄のみ			○	○		
77	4.4		漢文欄のみ			○	○	○	
78	4.5		漢文欄のみ			○	○		
79	4.6		漢文欄のみ			○	○		
80	4.7		漢文欄のみ			○	○		
81	4.8		漢文欄のみ			○	○		
82	4.9					○	○		
83	4.10		漢文欄のみ			○	○		
84	4.11		漢文欄のみ			○	○		
85	4.12					○	○		
86	5.1					○	○		
87	5.2		漢文欄のみ			○	○		
88	5.3					○	○		

※三島市立図書館所蔵本は藤岡武雄氏寄贈、金沢市立図書館所蔵本は小林輝治氏寄贈による。